

# 紙版 ハコブネ×ブックス vol. 9

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐwebサイトです。



## まがった時計

作者 吉田とし  
出版社 国土社  
発行 1969年12月



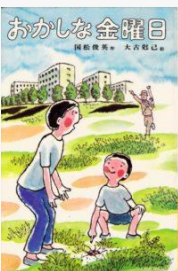
浜男は小学六年生。家族五人で狭い2DKのアパートで暮らしています。お母さんが病気になる、大医院で有名な先生に手術を受けるには、通常の手術料の他に**高額なお札**が必要でした。収入の少ないタクシー運転手のお父さんはお金を工面しようと奔走します。浜男は、優良ドライバーであるお父さんのことを自慢したいのに、学校に提出する書類の親の職業欄は**会社員**と書きなさいと両親に言われていました。高度成長期のこの頃、**タクシーの乗車拒否**が横行し、法外な金額を要求する運転手が社会問題となっていたのです。運転手も医者も人の命を預かっているのに、医者は手術料以外のお札を要求しても尊敬され、なぜタクシー運転手はそんな目で見られるのか。社会の理不尽に直面した時、人にも問いかける物語です。

特集

## 書庫との遭遇

社会派編

図書館には**隠し持っている本**があります。なんて言うのと秘密めいて聞こえますが、スペースの都合上、すべての本を書棚に開架できないので、**書庫に所蔵**されている本があるということです。たまにお蔵出し企画などで目に触れることがあるものの、借り出さない限りは、およそ眠ったままになっています。たしかに半世紀近く前の本ともなると、装丁も内容も古びたものとなり、現代の子どもたちには手に取りにくいものです。特に**社会問題を扱った作品**は、鋭く時代をえぐったが故に**時代遅れ**にもなりがちです。今回、紹介する本には、東京オリンピック直前の喧騒や公害、公営ギャンブル、社会格差、ネグレクトなど、現代の社会問題にどこか通じるものがあるような気がします。かつての児童文学はこうした社会派の題材を物語の中でどう扱ったのか。正義と公正を求める**パッション**にも驚かされるはず。是非、**書庫との遭遇**をお楽しみください。

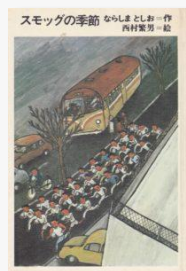


## おかしな金曜日

作者 国松俊英  
出版社 偕成社  
発行 1978年8月



父親が**蒸発**して一年。かもめ団地で母親と弟と暮らしている小学五年生の洋一は、それでも明るく活発な小学校生活を送っていました。しかし、代わりに働きはじめた母親にもまた**ストレス**が溜まっていき、ある金曜日、洋一が家に帰ると沢山の菓子パンやおかしと封筒に入れたお金をテーブルの上に残して消えてしまいました。母親の職場を訪ねてみても、すでに仕事を辞めてしまった後。知らない男からの母親への電話を思い出した洋一は、母親が**家出**をしたことを認識します。両親がいなくなった状況で、わずかなお金で弟と二人、生き抜かなければならなくなつた洋一。学校でこの事実を隠し通そうとする洋一でしたが、同級生の、みさ子とその変化に気づきます。**両親が戻ってこない現実**を踏まえて、新たな一歩を踏み出していく兄弟にエールを送りたくくなります。



## スモッグの季節

作者 ならしまとしお  
出版社 理論社  
発行 1973年1月



東京オリンピックの開催を翌年に控えた1963年。都市開発の喧嘩や高度成長の余波は、**公害**などの社会問題を生んでいます。中学校の教室でクラスのボスとしてわがもの顔にふるまっていたオンちゃんこと恩太郎は、自分たちの反乱によって、その立場を失ったまま学校生活を送っていました。高校に進学できるかどうかかわからない家の貧しさも彼に希望を失わせています。大人たちもまた社会の中で汲々として、工場労働者たちは**不当労働**に抗議し、経営者は汚い手で弾圧し、警察もまた乱暴に取り締まる。そんな場面にオンちゃんも巻き込まれていきます。**社会の発展の副産物であるスモッグ**は善悪を溶け込ませます。大人にもコントロール不能な荒んだ空気の中、子どもたちはどう生きていくのか。オンちゃんの自意識が活き活きと描かれた野心作です。



社会派の作品であっても、版を重ね、時代を越えて読み継がれている物語もあります。子どもたちに社会の問題点を提起し、考え方を深化させる試みを孕んだ物語は**普遍的な魅力**を持っています。**開架され続ける本**にもまた注目ください。



宿題ひきうけ株式会社 (古田足日)  
理論社 1964年(初版) 2001年(新版)



## 星と少年

作者 那須田稔  
出版社 講談社  
発行 1969年1月



田舎の漁村にできた**競艇場**は、漁師たちの暮らしを一変させました。魚が採れなくなり、**ギャンブル**にもはまって借金を重ねていく生活。子どもたちは、村を荒んだものにした競艇場に憎しみを募らせて、過激な手段で抗議しようと考えています。そんな時、誰かの工作により競技中に大きな事故が発生します。子どもたちは、自分たちが犯人にされてしまうことを恐れます。この漁村に東京から引越してきた競艇場のオーナーの息子の達也は、地元の子どもたちと対立しますが、やがて一緒に事件の犯人を秘密裏に知ったことで、お互いを見直していきます。真実の告発は大規模な**観光地化**を推進しようとする達也の父の陰謀を暴きます。過酷な戦後を生き抜いてきた大人たちに対峙し、子どもたちが敢然と正義を貫く物語です。

## 紙版「ハコブネ×ブックス」vol.9

2020年2月1日発行 ●発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト **ハコブネ×ブックス** (非営利) を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。



© tomoostretch